

以前聞いたのですが、シカゴだかに大きな鐘詰工場があつて、そこでは機械の口から生きた牛を入れてボタンを押すと出口から牛肉の鐘詰がゾロゾロと出てくるそうなの。だからあやまって人間を入れたら人肉の鐘詰が出て来たとか出てくる筈だとかいう話でした。

他の学校との対抗試合に勝つて熱狂した学生たちが殊くん選手を胴上げしている最中に、一同の注意を一方に奪つてしまふ事件が起きて、皆がそろつて、ヒョイとその方を振り向いたので、ちやうど運悪くその時空中高く投げあげられていた選手を受けとめる手が、いつせいにお留守になつたために、選手は円陣のまんなかのコンクリートの上に逆さまに落ちて頭に死なんばかりの大ケガをした。これは私自身が学生時代に見たことです。

それからギウギウづめの満員電車の中で、他人を押そうと思う人は誰一人いないのに、次々と隣りから押され押された末端の人が、肋骨を折つたり電車から落ちて死んだりした事件は終戦前後の時代には珍しくありませんでした。

三つともオウトマテイズムによる災害です。いづれの場合も事件のどこを捜しても犯意や害意を持った人がいません。災害を悪とするならばそれを行った悪人がいないのです。ばかりでなく、

事件に参加した全員に悪意が無かっただけに、その災害の結果について強い責任を感じる者もないと言うのが通例です。そのへんの関係が実に怖ろしい。

そして言うまでもなく、科学の発展とそれの人間生活への適用の拡大のために、シカゴの工場のオウトメイションは各界のあらゆる面に伸びつつあり、そこへ地球上の人口はグイグイと増し、人事は幾何級数的に交錯して、一緒になってひしめいています。オウトマティズムは無数にもつれ合つて唸りを立てているのです。

ところで同時に私ども人間の上にもこれと照応して、戦後いちじるしい一つの現象が生れてきています。それはどうしても犯罪者らしく見えない兇悪な犯罪者の数がむやみとふえたことです。これは日本だけでなく世界共通のことらしい。思いきつてムザンな傷害や殺人などが多くなり、そしてその犯人が捕えられたのを新聞写真などで見るとたいがいおとなしそうな顔をしているのです。犯行の動機や経路や心理などもアツケないほど単純なようで、その罪の血なまぐささささわしいような根深い毒々しいものがどこにもありません。

中には人を二人も殺しておきながら「世間をさわがしてすみません」などと小娘のようにメソ泣いたり、ポカンとしているようです。またそんな連中は犯行によって実におかしい位に小さな目的しか達していないのが普通で、人を殺して奪った金が六百円だったなどというのが珍しくない。それをフラツとやってしまうようで、執念深く計画し打算して実行することに耐え得ないらしい。戦後私の知った若者の中にもそういうのが二三いましたが、みんな極く実直で女のようにおとなしい、他に対して悪意というものを持たない、と言うより持ち得ない性質の、言わば「善意の人」です。それが何かにヒョイと押されて思いがけぬ時にびっくりするような兇行を演

ずる。悪の意識などもかんたんなものです。だから憎むことも出来ません。憎悪に値しないので、これにくらべると刑余の人たちなどは意外な位に悪行を演じることはすくなくない。悪事を犯せば悪いむくいがあることを知っているために、やむにやめない理由がある時にはそれを犯すので、たいした意味もなく人を斬ったりはしないのです。だから仕向け方しだいで安心なわけだが、前記の無邪気な兇悪犯人は充分な意志も罪の意識も無しに兇行を犯すのだから、どうにも仕向けようが無いわけで、つまり犯罪と言うよりも正確にはアクシデントなのです。これが戦後急激にふえてきています。

その防止や救援の方法は構ってもらわねばならぬでしょうが、それとは別にこの現象と最初に書いた各種のありがたくないオウトマテイズムとを突き合わせて掻きまわして錯そうさせた状況は当分の間ますますひどくなると考えてよいでしょうから、予見できる災害の数と質にはゆだんできないと思われまます。そして言うまでもなく災害の中で最大のものは、「戦争」でしょう。今となつては意識的かつ積極的に戦争を望む人間は地球上に一人もいないにちがいありません。だから万々が一、戦争が起きるとすると誰もが望まない大災害がおきるということになります。実に馬鹿げた恐ろしい事で、その点でたしかに人間の歴史は一步あやまれば馬鹿げた恐ろしい段階にさしかかかっているとさえ言えそうです。船に積んだクリスマス・プレゼントの品々がこすれ合つて自然発火して船を焼いてしまうようなもので、災害の度合いは完全に終末的で、文字通り取り返しのつくようなもので無いことは言うまでもありません。

しかしオウトマテイズムの悪魔の力がこのように強くなり錯そうし、悪人は求めて得られぬことになってくると、何をどのようの用に用心すればよいのか？ ちよつと正確な見当はつきませんが、

どのような手段方法がとられるとしても次ぎの条件だけは備えていなければ効果的ではないような気がします。

第一に私どもを取りかこんで動いている大小さまざまなアウトマテイズムを科学的に査察し調整する機関が必要です。それは国内的にも国際的にもすべての政治的権力からできるだけ遠く離れて在るのがよい。次ぎに人間性についての広はんな病理学管理がどうしても必要でしょう。そしてそれは特に政治や科学や組織や権力などの要所々々の部署に在る人々、つまり重要なボタンやスイッチのそばに坐っている人々を絶えず重要視しなければなりません。

(これは昭和三十三年十二月十九日の読売新聞に、「三好氏は去る十六日死去、夫人の話では十二日頃書かれたと推定され、筆者の絶筆となりました」と追って書きを加えて掲載されたものである。)

底本.. 「三好十郎の仕事 第三卷」 學藝書林

1968 (昭和43) 年9月30日第一刷発行

入力.. 伊藤時也

校正.. 伊藤時也

2011 (平成23) 年8月19日